

自由研究発表

フローレス島の村の「大儀礼」
—儀礼のアクチュアリティから芸術と環世界論をみる—
“The Great Ritual” of a Village on Flores Island:
Art and Umwelt Theory in a Perspective of Ritual Actualities

青木恵理子（龍谷大学）
AOKI Eriko (Ryukoku University)

東部インドネシアでは、大伝統に影響を受けていない儀礼が、変転する環境のなかで実践されている。本発表は、フローレス島の村で実践されている「大儀礼 Nggua Ria」のアクチュアリティを通して、芸術と環世界論での儀礼観を考察する試みである。

儀礼は、文化人類学において、研究史の初期から注目されてきた。『金枝篇』（1890年）の著者フレイザーは、呪術儀礼を人間の観念連合と科学が明らかにする自然の因果法則を取り違えた行為だと文化進化論の視座から断じた。構造主義者レヴィ＝ストロースが儀礼を象徴行為と位置付けて以来、儀を意味の問題として扱うことが主流になった。しかし、遂行している人々自身が儀礼行為に意味を考えていないことが多いことが判明し、その後、規約論やパースの記号論の観点から論じられるようになった。近年は地球環境問題が深刻になり、人間を主体、自然を普遍的な客体とする西洋近代的暗黙の前提が環境問題の元凶にあると考えられるようになり、マルチスピーーズ人類学や環世界の視点から儀礼が論じられるようになった。

一方、芸術は、西洋近代において、世界に働きかける混然とした技術アルスが崩壊し、科学技術と分離することによって成立した。20世紀に芸術パフォーマンスの領域が成立すると、パフォーマンスを儀礼と称する芸術家も出現した。環境問題に直面している現在、芸術関係者のシャーマン、アニミズム、儀礼に対する関心のもとに、環境世界に働きかける作品やパフォーマンスも多く実践されるようになった。

儀礼芸術も環世界論も西洋近代に成立した芸術と学術（科学）に根を張っている。現在の人類の危機を考えるためには、芸術と学術を相対化する身体化された実践が必要である。その一つとして、「大儀礼」を取り上げる。

石井美保 2017 『環世界の人類学』 京都大学学術出版会
長谷川祐子編 2022 『新しいエコロジーとアート』 以文社
フレイザー、J.G. 2003 『金枝篇』 上・下 筑摩書房
レヴィ＝ストロース、C. 1972 『構造人類学』 みずず書房